

【実践報告】

スクールカウンセラーによる高校新入生の学校適応への支援 —構成的グループエンカウンターを活用した援助—

木村 佳穂* 荻間澤 勇人**

本事例は、スクールカウンセラーである報告者が、高等学校新入生 180 名に対し、入学時のリレーション形成を目的に援助を行った事例である。生徒の適応感を高める技法として構成的グループエンカウンターを活用した。報告者はアセスメントを行い、集団の状態と目的にそったエクササイズの設定と構成を第二著者と共に行った。その結果、新入生の集団活動における緊張感は緩和され、リレーション形成が促進された結果が示された。このことから、入学時における構成的グループエンカウンターの活用は、新入生の不適応の予防として効果的であると考ええる。また、スクールカウンセラーの専門性は、構成的グループエンカウンターの展開を考える上で効果を示した。スクールカウンセラーは心理教育的援助サービスの専門家としてグループ・アプローチなどの集団に対応できる力も身につけておくことで、学校の幅広い援助ニーズに対応することができると考える。

キーワード：高校新入生、構成的グループエンカウンター、スクールカウンセラー

【はじめに】

文部科学省 (2009) によれば、2008 年度における私立・公立・通信制高校を含めた高等学校への進学率は 97.8% となっており、過去最高の水準を示している。一方、高等学校の中途退学者数の変化をみた場合、全体の中途退学者数は年々減少しているものの、その中で学校生活・学級不適応を理由に中途退学をする高校生は増加傾向にあり、その多くは 1 年次に中途退学をしているという結果が示されている (文部科学省, 2009)。高等学校はそれまでの義務教育とは違い、自らの決断によって始まる新生活である。新入生の中には、期待や喜びを抱える生徒がいる一方で、「この学校は自分に合っているのか」「新しい友達はできるのか」という不安、不本意入学などからくる不満を抱えつつ生活している生徒も多いと推察される。そのような気持ちを抱えながら新生活 1 年目を乗り越えることは、新入生にとって大きなハードルの一つになっていると考える。

構成的グループエンカウンター (Structured Group

Encounter : 以下 SGE) は、ありたいようなあり方を模索する能率的な方法として、エクササイズ (課題) という誘発剤とグループの教育機能を活用したサイコエジュケーション (心理教育) である (國分, 1981)。粕谷・小野寺・大谷 (2006) は、高校入学時の適応に影響をもつ可能性のある要因として、「学校生活への不安」、「学校での対人関係への回避的な認知」、「学校や教師に親しみを感じ、学校生活に自分の将来につながる価値を認め期待を持つこと」の 3 要因を指摘している。その中でも、関係回避意識を低下させる援助として SGE を提案しており、入学後の早い時期にこれらの要因への介入をすることが、入学時の不適応や中途退学問題への予防的対策につながると考えられるとしている。このことから、高校生活のスタート時に不安や不満を抱える新入生にとっては、SGE を通した人間関係構築の援助は有効であると考ええる。

SGE の実施に際し、原田・田中 (2006) は、学校現場において SGE が 1 つのブームとなっている一方で、本来必要な準備や配慮が欠如したまま安易に実施されている現状を指摘している。品田 (1996) は、SGE を実施するリーダーの配慮すべきこととして、メンバーのレディネスや発達段階を考えたエクササイズの設定はも

* 栃木県スクールカウンセラー

** 岩手県立盛岡農業高等学校

ちろんのこと、実施中のレディネスや発達段階への配慮をすることの重要性を強調している。このことから、SGEの実施を検討する場合、対象を理解する専門的な視点を持つことや集団を把握しながら動かす力を持つことは、より効果的なSGEを展開する上で有効であると考え。スクールカウンセラー(以下、SC)は、いじめや不登校などの生徒指導上の諸問題に対応するため学校に派遣されている心理教育的援助サービスの専門家である(石隈, 1999)。SCの主たる役割の1つは心理教育的アセスメントである。SCが普段からクライアントのレディネスや発達段階をアセスメントしている視点は、SGEの構成を考える上で効果的に発揮されることが考えられる。

本稿は、高校新入生180名に対し、新しい環境でのリレーション形成を目的にSCがSGEを行った事例である。エクササイズは、國分・國分(2004)を参考に、リーダーが若干の変更を加えて実施された。第二著者は、SCのスーパーバイザーとしてエクササイズの選定と構成をSCと共にを行った。また、SGE実施の際には会場に同席し、集団へのカウンセラー役とリーダーであるSCへのスーパーバイズを行った。SGEは入学後2日目に行った。実施後の感想の検討を通し、SCがSGEを行う効果を考察する。

【援助の概要】

援助の対象 A県の沿岸に位置するB高等学校1年生180名(男子93名、女子87名)を対象とした。

援助の時期 入学式の次の日である200x年4月8日に実施した。

援助の場所 B高等学校では、新入生ガイダンスとして、市内にあるホテルを使い一泊二日の学習合宿を企画していた。その活動の一環として、新入生の人間関係作りを目的とし、SCが3時間のSGEを行った。

援助に至った経緯 B高等学校の進路指導主事から第二著者に対し、新入生ガイダンスの場でのSGE実施の依頼があった。B高等学校では、友達作りの下手な生徒や人間関係で悩む生徒が多くなってきていると感じており、援助の必要性を感じていた。また、学校の教師の中にはSGEの知識を持った教師が在籍しておらず、教師自身もSGEを学びたいと感じていること

が示された。そこで、第二著者から依頼を受けた第一著者がリーダーとなり、SGEを実施することとなった。第一著者は、教育カウンセリングを専門に学んでいるSCである。SCとしての経験は6年目であり、勤務校でのSGEのリーダー経験があった。第二著者は高等学校でSGEの実践を行っている経験から、SCのスーパーバイザーとして援助を行なった。

【集団のアセスメント】

SCは生徒の現状を把握するため、B高等学校の教師から、学校の現状やこの活動に求める目的などについて、メールのやりとりを通して聞き取りを行った。

B高等学校は普通科のみの県立高等学校であった。新1年生は5クラスからなり、全生徒数は180名であった。B高等学校では例年、友達づくりで悩む生徒が複数名いた。学校はその要因として、小規模中学校から入学してくる生徒が多く、入学当初の人間関係作りがうまくいかない生徒が出ている点を感じていた。B高等学校では入学式直後から応援歌練習があり、ハードな練習日程が組まれていた。その活動中、入学当初に友人を作れなかった生徒の中には、1人で活動のつらさを乗り越えられずに不登校に陥る生徒がいることがあげられた。特に、1年次に不登校となり、そのまま退学する生徒が毎年数名おり、学校は大きな問題と捉えていた。学校全体の流れとしては、1年から3年に上がるにつれて、生徒の活動性が低くなっていると感じていた。授業中の反応も薄くなる傾向があり、生徒は小グループ化し、仲間内だけで学校生活を楽しむ様子が見られていた。そのような様子から、学校としては人間関係を良好にする、友達作りに良いきっかけをあたえる活動が必要ではないかと考えていた。そこで、新入生ガイダンスの中で人間関係作りの時間を作り、人間関係形成の援助を行いたいと考えていた。

以上の内容から、SCはB高等学校では新入生のリレーション形成を求めていると推察した。小規模中学校出身の生徒が新しい環境の中で居場所を作ることができるように援助を行う必要があると考えた。そこで、アセスメントの結果から、①集団活動における緊張の緩和、②新たな人間関係を築くための小集団による関わり、③自己開示を通じた感情交流、の3つのねらい

Table 1 エクササイズの内容およびねらい

プログラム	エクササイズ	ねらいと内容	展開の意図
第1クール	インストラクション	・リーダーの自己紹介とルールの確認	活動の意図を伝え、参加動機を高める
第2クール	あとだしジャンケン ジャンケンチャンピオン 牛男さんと馬子さん なべなべ底抜け	・リーダーとのリレーション作り ・ペア作り ・軽い身体接触を通じた関わり ・二者から小集団へと広がりながら 気持ちを合わせて動く心地よさを経験する	身体を動かし、声を出すエクササイズを通して、自然な緊張の緩和をはかる
第3クール	質問ジャンケン 他己紹介 サイコロトーク	・ペアとのリレーション形成 ・ペアの人を他者に紹介し、少しずつ対人関係を広げる ・さいころの出た目にあるお話を話し、感情、価値観の表現を行う	第1グループのリレーション形成
第4クール	グループ分け 足じゃんけん 友達ビンゴ 二者択一	・新しいペアの形成 ・小集団でのリレーション形成 ・感情、価値観を他者と共有する ・様々な考えを持つ他者との交流	第2グループのリレーション形成
第5クール	いいとこ四面鏡 全体シェアリング	・体験で関わった他者へ印象を伝え合う ・振り返りシートの記入	第1・第2グループとの感情の分かち合い

を設定した。

【エクササイズの選定と構成】

SGE のねらいが設定されたことから、それに対応するエクササイズを選定した。エクササイズの選定と構成はスーパーバイザーとともにいった。各エクササイズと内容およびねらいについては、Table 1 に記した。

本 SGE は、新しい環境でのリレーション作りを目的としていた。そこでインストラクションでは、B 高等学校は小規模中学校からの入学者が多いことにふれ、今日の活動が出身中学校を越えていろんな人と知り合う活動であることを明確に示した。また、違う出身中学校の生徒との関わりを意識的に促進させるため、参加する生徒には出身中学校のジャージを着用してもらい、出身中学校を視覚的に示すように構成した。エクササイズ実施時には、「同じ色のジャージの人だけでグループを組まないこと」を指示としていた。

実施日が入学式の次の日であることを考慮し、生徒の新生活への不安は高い状態にあると推察した。そこで、エクササイズが開始される第2クールでは、身体を動かし、声を出すエクササイズを重点的に設定した。國分・國分(2004)は、エクササイズの中で動きのあるものはゲームの色彩が強く、自然に楽しみながら交流ができると述べている。ゲーム性の高いエクササイズを最初に行うことで、抵抗なく緊張緩和がはかられる

と考えた。

自己開示のエクササイズでは、自分の価値観を表明することで人間関係作りのきっかけになることを意識し、自己紹介を意識した内容のものを選定した。また、ワークシートを準備し、話しやすい内容をあらかじめ設定しておくことで、抵抗感なく自己開示ができるように構成した。

また、各エクササイズの中に「お願いします」「ありがとうございました」など、あいさつのソーシャルスキルを取り入れた。あいさつは人間関係を開始し、良好な関係を維持するための基本スキルである(相川・佐藤, 2006)。今回の活動を通しあいさつのスキルを身につけておくことで、普段の学校生活に活かされると考えた。

SGE のリーダーは SC が行った。学級担任には、ワークシートやさいころなどの用具配布時の手伝い、小集団に別れる際に生徒への声がけをお願いした。本 SGE は生徒の緊張感が高い時期に実施した。その為、生徒の中には実施中に強い抵抗を示す生徒が出ることも考えられた。そこでスーパーバイザーには、そのような生徒が出た場合のカウンセラー役をお願いした。また、予定していたエクササイズがうまくいかなかった場合に備え、替えのエクササイズの準備も行った。スーパーバイザーには、高校での SGE 実施経験が乏しいリーダーのスーパーバイズもお願いした。

【援助経過】

SC がリーダーとなり、SGE を実施した。対象者数は、欠席者を除く 176 名(男子 90 名、女子 86 名)であった。スーパーバイザーは会場後ろで見学し、カウンセラー役に徹した。エクササイズ中、SC は孤立する生徒がでないよう、グループ作りの動きに注意を払い行った。

第 1 クールでは、リーダーの自己紹介と活動の意図を伝えた。中学校のジャージを着てもらっている理由をふまえ、今回の活動が新しい環境での人間関係づくりであることを説明した。そして、「積極的に違う学校の生徒と話をしたい」というリーダーの思いを伝えた。生徒は、初めて SGE に取り組むことから、緊張している様子が見えた。

第 2 クールでは、身体を使った緊張緩和のエクササイズを行った。最初のエクササイズでは、生徒の表情はまだ硬い様子であったが、徐々に笑顔が見えるようになった。「牛男さんと馬子さん」のエクササイズの際には笑い声が聞こえるようになり、「なべなべ底抜け」のエクササイズの際には、各グループから大きなかけ声が聞こえるようになった。特に男子から大きなかけ声や笑い声が聞こえ、その様子を見て女子が笑うなど、明るい雰囲気全体に広がる様子を感じられた。この様子から SC は、生徒の緊張が徐々に解けてきている状態にあると感じた。

第 3 クールでは、小集団の中で自己開示を行うことでリレーション形成をはかるエクササイズを実施した。第 2 クールで作った 2 人組に戻り、「質問ジャンケン」を実施した。活動は全体的にスムーズに進んだが、女子の中に表情が強ばっている様子の生徒が数名見られた。そのような生徒は徐々に増え、4 人組で行った「サイコロトーキング」のエクササイズでは、活動に参加していない生徒はいないもののグループ内の様子はよそよそしく、消極的な様子が見えた。生徒は、エクササイズが終了すると会話を止め、下を向いて過ごしていた。会話をしているにもかかわらず、隣のひとと 2 人でひそひそと話したり小さく笑いあっている状態で、全員で会話をしているグループは見られなかった。SC は全体的にも第 2 クール終了時の柔らかな雰囲気から、再び硬さのある雰囲気になっていると感じた。SC は、

緊張感が完全に抜けきっていない中で自己開示を伴うエクササイズに入ったことにより、再び生徒の緊張感が高まっていると推察した。そこで、再度緊張緩和のエクササイズが必要であると考えた。SC はスーパーバイザーと相談を行い、第 4 クールの始めに行う予定だったエクササイズを変更することを検討した。

第 4 クールでは当初、最初に「誕生日チェーン」のエクササイズを行う予定であった。しかし生徒の様子から、声を出しながら身体を動かせる「足じゃんけん」のエクササイズを行った。「足じゃんけん」は最初は 2 人組から行い、徐々にグループを大きくして行った。グループを大きくすることに、対戦相手とハイタッチや握手をする活動を入れ、いろんな人と自然に触れ合う機会を作った。グループが大きくなるごとに生徒の掛け声は大きくなり、勝敗によるリアクションが自然に見られるようになった。グループ内でお互いの顔を見あい、笑い合う様子が見られるようになった。このような様子から SC は、生徒の緊張感が再び和らいできていると感じた。そこで、当初の予定であったリレーション作りのエクササイズをすすめていった。「友達ビンゴ」では、男子の元気さに女子グループが負けている様子を感じられたが、「二者択一」のエクササイズでは、男女共にグループ内の盛り上がりを感じられた。お題が早く終わってしまった後もグループ内で自由に会話をしている様子が見られた。SC は生徒のリレーションは深まってきていると感じた。

第 5 クールでは、活動のまとめとして、「いいとこ四面鏡」によるお互いの印象の伝えあいを行った。自分の手元に戻ってきたシートを読みながら、うなずいたり、笑いあったりしている生徒の様子が見られた。エクササイズ終了後には、感想をまとめる振り返りシートを全体に配布し、記入を求めた。使用した振り返りシートを Appendix 1 に示した。

【結 果】

1. 質問項目からの検討

質問項目の結果を Table 2 に示した。「活動前に比べ、緊張感はなくなりましたか」の質問には、男女ともに約 6 割の生徒が「とてもそうだ」に丸をつけていた。また、「新しい友達との心の距離は近づきましたか」「こ

Table 2 質問項目の集計結果

	5 とてもそうだ		4 だいたいそうだ		3 どちらともいえない		2 あまりそうではない		1 そうではない	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1.活動前に比べ緊張感はありませんでしたか？	52 55.9	50 57.5	31 33.3	37 42.5	6 6.5	3 3.4	0 0.0	1 1.1	0 0.0	0 0.0
2.自分から積極的に、遠う ジャーの友達に声をかける ことはできましたか？	38 40.9	12 13.8	32 34.4	40 46.0	11 11.8	26 29.9	4 4.3	6 6.9	3 3.2	2 2.3
3.新しい友達との心の距離は 近づきましたか？	45 48.4	34 39.1	34 36.6	47 54.0	9 9.7	4 4.6	0 0.0	1 1.1	1 1.1	0 0.0
4.これからの学校生活は楽し みになりましたか？	44 47.3	33 37.9	32 34.4	46 52.9	12 12.9	5 5.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 2.3
5.次回こういう活動があるとし たら、また参加してみたいで すか？	29 31.2	25 28.7	33 35.5	40 46.0	19 20.4	18 20.7	6 6.5	2 2.3	2 2.2	0 0.0

男93 女87 計180
* 上段(人) 下段(%)

れからの学校生活は楽しみになりましたか」の質問には男女ともに約8割の生徒が「とてもそうだ」「だいたいそうだ」に丸をつけていた。このことから、SGEを通して緊張緩和とリレーション形成が促進され、そのことがこれからの学校生活への動機を高める結果になったと推察された。また、残りの2割の生徒は「どちらともいえない」に丸をつけていた。この結果は、未だ緊張感の高い生徒が2割存在していることを示唆しているものであると推察された。

2. 自由記述からの検討

1) 質問6についてのまとめ

心に残ったエクササイズを上位5位までまとめた。結果はTable 3に示した。

もっとも多かったのは、足じゃんけんのエクササイズであった。このエクササイズは緊張緩和を意識し、声を出し、身体を動かすエクササイズであった。2位以降のエクササイズも、ゲーム性が高く、自然な感情交流が図れるエクササイズが続いていた。本SGEでは、実施時の生徒の不安は高い状況にあると推察していた。結果から、緊張緩和と自然に自己開示が図られるエクササイズが上位に選ばれていたことから、生徒は新しい環境での緊張感の緩和、人間関係作りを望んでいたと考える。生徒の実情に合ったエクササイズの選択ができていたと考える。

2) 質問7についてのまとめ

SCとスーパーバイザーが検討し、内容がポジティブなものとそうではないものに分類した。その後、それぞれの内容をKJ法によって整理した。まとめた内容はTable 4に示した。

9割の生徒からは、今回の取り組みをポジティブに捉えている感想が聞かれた。これらの内容をまとめると、まず最も多かったのは、「楽しかった」「参加できてよかった」などの活動全体に対するプラスの評価であった。これらの感情は、活動開始時の緊張状態が緩和され、抵抗感なく参加できたことを示すと考えられる。このことから、「緊張状態緩和によるプラスの評価」とまとめた。二つ目は、「触れ合うことは大切だと思った」「案外みんな気さくだった」「明るい人もいれば暗い人もいた」など、他者理解が促進された内容であった。このことから、「他者理解の深まり」とまとめた。三つ目は、「いろいろな人との心の距離が縮まった」「友達ができて良かった」「友達が増えた」など、人間関係の構築が図られた内容であった。このことから、「人間関係の形成」とまとめた。四つ目は、「今後の高校生活が楽しみのになった」「これからたくさんの友達を作っていきたい」「今日みたいに積極的に話しかけていきたい」など、今後の生活に対する前向きな姿勢が表れている内容であった。このことから、「新生活に対する意欲向上」とまとめた。これらの結果は、SCがねらいとしていた①集団活動における緊張の緩和、②新たな人間

Table 3 自由記述（質問6）のまとめ

6. 活動の中で心に残っているエクササイズは何ですか？

エクササイズ名	人数 (%)	理由
1. 足じゃんけん	61 人 (34.7%)	<ul style="list-style-type: none"> ・団体戦があったのがおもしろかったから ・グループで何を出すのかを話し合った時に、他の友達と話すきっかけになったから ・時間は短いけど、チームみんなと顔を合わせて話をすることができたから
2. サイコロトーク	31 人 (17.6%)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループの人達の好きなものなどを知ることができたから ・エクササイズが終わった後も、ずっと話が続けておもしろかったから
3. 質問ジャンケン	26 人 (14.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ・とても盛り上がったし、相手のことをたくさん知ることができたから ・話していて相手のことを知ることができたから
4. いいとこ四面鏡	22 人 (12.5%)	<ul style="list-style-type: none"> ・人によって自分の印象が違うんだなと思ったから ・自分がみた自分と他人がみた自分に差異があるのが分かったから
5. 友達ビンゴ	18 人 (10.2%)	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなと打ち解けることができたから ・みんなの思っていることが分かったから

男 93 名, 女 87 名 計 180 名

Table 4 自由記述（質問7）のまとめ

7. 全体を通して、思ったこと、感じたことがあったら何でもいいです。教えて下さい。

ポジティブな回答 159 人(90.3%)

<理由>

- | | |
|---|-------------|
| 1. 「楽しかった。」「参加できて良かった。」 | |
| …緊張状態緩和によるプラスの評価 | 59 人(37.1%) |
| 2. 「触れ合うことは大切だと思った。」「案外みんな気さくだった。」 | |
| …他者理解の深まり | 46 人(28.9%) |
| 3. 「いろいろな人との心の距離が縮まった。」「友達ができて良かった。」 | |
| …人間関係の形成 | 31 人(19.5%) |
| 4. 「今後の高校生活がとても楽しみになった。」「これからたくさん友達を作っていきたい。」 | |
| …新生活への意欲向上 | 22 人(13.8%) |

ポジティブな回答ではないもの 17 人(9.7%)

<理由>

- | | |
|--------------------------|------------|
| 1. 「クラスの人も交流ができたならよかった。」 | 3 人(17.6%) |
| 2. 「話しかけるのは難しかった。」 | 3 人(17.6%) |

* 無回答

6 人(35.3%)

理由は複数回答

関係を築くための小集団による関わり、③自己開示を通じた感情交流、に沿った結果であると考えられる。一方で「クラスの人とも交流ができたよかった。」という感想が聞かれた。今回のSGEはクラスのまとまりを考慮せず、学年全体の親和を促進する構成になっていたと考える。その結果、生活の基盤となるクラス内の人間関係構築までには至らなかった可能性が示唆される。クラスのまとまりを意識したエクササイズの設定が必要であったと考える。

3. まとめ

振り返りシートに記入された内容から、質問項目と自由記述に分け、SGEの効果の検討を行った。その結果、質問項目、自由記述ともにSGEの効果を示された結果であると考える。活動のねらいが達成された結果、新しい環境での人間関係の形成を促進させたと考ええる。

【考 察】

1. 集団に合わせた構成の配慮の必要性

原田・田中(2006)は、学校教育におけるSGEの留意点として、①学級集団や児童生徒のアセスメント、②それに合わせたインストラクションとエクササイズの設定と実施、③実施中の観察と柔軟な対応、④実施後のシェアリング、の4点を不可欠な要素と指摘している。

本事例では、B高等学校の教師とメールのやりとりを行い、アセスメントを行った。その結果、学校の背景、生徒の実態、教職員が問題と感じていること、生徒にどのようなしてほしいか、などの情報を得ることができた。このように、生徒の現在の様子だけでなく、どのように成長させたいかというゴールの姿を確認することは、構成を考える上で必要な情報であったと考える。ゴールが明確であれば、そこに向かう道筋はぶれることがない。河村(2001)は、SGE構成のポイントとして、①「現在地」の把握、②「目的地」を見つける、③「方法」を考える、の3点を考慮することが必要であると述べている。本事例においても、アセスメントをしっかり行ったうえで目的地を定めたことが、生徒の実態に合ったSGEの構成に繋がったと考える。

エクササイズの設定と構成は、スーパーバイザーと共にやった。アセスメントの結果から、エクササイズの設定は、①集団活動における緊張の緩和、②新たな人間関係を築くための小集団による関わり、③自己開示を通じた感情交流、を意識したエクササイズを設定した。構成では、出身中学校のジャージの活用、抵抗を抑えるためのワークシートの作成を行った。また、状況に応じてエクササイズを変更できるように、替えのエクササイズの準備も行った。生徒の抵抗に個別で対応できるように、スーパーバイザーにはカウンセラー役として同席してもらった。また同時に、高校でのSGE経験が不足しているSCのカウンセラー役も担った。河村(2001)は、構成はグループ体験を成功させるための大きなポイントであると述べている。本事例においても、スーパーバイザーのアドバイスを受けながら、集団の要因だけではなく、活動により予想される生徒の感情の動き、SCの実施経験なども考慮し、構成を行った。このように様々な事態を予想し丁寧な構成をしたことが、効果的なSGEの構築に繋がったと考える。

SGE実施中は、SCは生徒の反応に注意を払い、その都度生徒の状況把握に努めた。生徒の表情やグループ内での会話の様子、声のトーンなどから生徒の雰囲気を感じ取るようにした。その結果、第3クールでの生徒の雰囲気の変化を感じ取り、すぐにエクササイズの変更を行うことでSGEの流れを修正することができた。状況に応じて変更できるエクササイズを事前に準備しておいたことも、スムーズな対応に繋がったと考える。このように、状況に応じ柔軟に対応できたことで、本活動のねらいからはずれることなく、目的を達成できたと考える。

実施後のシェアリングは、振り返りシートを用いて行った。國分(1981)は、まとめの時間の骨子は「将来志向的」な態度の育成であると述べている。その為、SGEに参加して学んだこと、気づいたこと、感じたことを整理する点をポイントとして挙げている。本事例で用いた振り返りシートは、このポイントを押さえた作りになっており、生徒の将来志向を促すことに繋がったと考える。これは自由記述のまとめの内容に「今後の学校生活に対する意欲向上」が含まれていることから明らかである。

以上から、本事例のSGEの展開は原田・田中(2006)が指摘する実施上の留意点を考慮した展開となっていると言える。アセスメントにより生徒の実情をつかみ、目標を元にエクササイズを構成し、まとめるという一連の流れを押さえたことが、SGEの成功に繋がったと考える。

2. スクールカウンセラーが構成的グループエンカウンターを実施することの効果

アセスメントは、援助・指導の方法を決定する際に必要な来談者や周囲の客観的理解を得るための一連の過程をさす(橋口, 1990)。個人および集団への支援、どちらにおいてもアセスメントは重要な役割を果たすと考える。SCは心理教育的アセスメントの専門家である(石隈, 1999)。本事例においてSCは、新入生ガイダンスの担当である進路指導主事からの情報をもとにアセスメントを行った。学校の立地条件・特色、入学してくる中学校の状況、ここ数年の学校としての課題など、様々な情報を統合し、学校が求めている援助ニーズを導きだした。その結果、集団にマッチした目標・援助方法が確立され、SGEの効果に繋がったのだと考える。集団のアセスメントを行う上で、生徒のレディネスや発達段階を的確に図るSCの視点は有効に活かされたと考える。

また、國分(1981)はSGE実施中にリーダーが関心を払うポイントの1つとして、予定のエクササイズを予定の時刻に予定した方法で、と機械的に実施するのではなく、メンバーの感情のリズムに合わせながら展開することが大切であると述べている。本事例において、SCは第3クールの様子から生徒の雰囲気の変化を感じた。笑い声は少なくなり、表情は硬く見えた。エクササイズ終了後、生徒の交流は2人組にとどまり、中には1人で過ごしている生徒もいた。この様子から、生徒は中集団での自己開示を伴う活動に不安を感じ緊張感が高まった結果、少人数での関わりに逆戻りしていると考えた。そこで第4クールではゲーム性が高く盛り上がるエクササイズに予定を変更し、再度緊張緩和を図った。その結果、生徒の不安が軽減され、その後の自己開示を伴うエクササイズに移行した後も、集団の交流が促進されたと考える。このように、エクササイズ実施中も繰り返しアセスメントを行い、その状況にあったエクササイズの変更と動きを取り入れる柔

軟な対応を行ったことが、その後のエクササイズの成功に繋がったと考える。心理教育的援助サービスの専門家としてのSCの専門性が効果的に発揮されたと考える。

武田(2005)は、SCの活動内容の1つとして、学年集会や一般授業におけるサイコ・エデュケーション的支援を挙げている。また、河村・武蔵・粕谷(2006)は、教師がSCに期待する活動として、個別対応だけではなく、学級集団に対する支援の仕方が含まれることを指摘している。児童・生徒の援助ニーズが多様化する現在、教師は多忙を極める現状がある。児童・生徒の援助に役立つ心理的技法は様々開発されているが、教師が学び、実践するだけの余裕は必ずしもあるとは言いがたい。実際、B高等学校においても、学校は問題を理解し効果的な援助を加えようとする一方で、効果的な援助に関する知識の不足、それを行える人材の不足が示されていた。教師自身は学ぼうとする意欲があるものの、その時間を持つことのできない実状があった。このような学校現場の現状を考えると、SCが教師の求める知識の伝達役となり、実践の援助を行うことは効率的な学習の場となると考える。SCが実際に行ってみせることで教師が学び、それが学校現場で活かされることは、SCの専門性がより多くの生徒へ活用されることに繋がると考える。

いじめ問題や学級崩壊など集団の問題が増える中、学校現場はSCに対して、個別援助から集団援助まで幅広い援助ニーズを持っていると推察される。このことから、SCは個別面接だけに終始するのではなく、グループ・アプローチなどの集団に対応できる力を身につけておくことで、より学校現場のニーズに応じることができると考える。

3. 考察のまとめと今後の課題

本事例では、学校からの依頼を受け、他校に勤務するSCがSGEのリーダーを務めた。SCはアセスメントの結果から、新入生のリレーション形成を念頭に、①集団活動における緊張の緩和、②新たな人間関係を築くための小集団による関わり、③自己開示を通じた感情交流、の3点をねらいとした。アセスメントに基づいたエクササイズを選定し、構成を行った。実施の際には、集団の様子から判断し、エクササイズの変更を柔軟に行った。その結果、生徒のリレーション形成

は促進されたことが示された。このことから、SCが行ったSGEを用いた援助は効果を示したと考える。

一方、感想においてネガティブな回答をした生徒が2割いた。本事例は、入学式直後の時期に実施したことから、不安や緊張が相当高い生徒が存在しており、結果として活動にうまくのれなかったのではないかと推察される。このような生徒への緊張緩和をうまく促進できなかったことは、リーダーの力量不足であったと考える。今後は、緊張の度合いが強い生徒の存在も考慮したSGEの構成のあり方、またエクササイズにのれなかった生徒への効果的なフォローアップの方法を検討することが課題であると考えられる。

【引用文献】

- 相川 充・佐藤正二 2006 実践！ソーシャルスキル教育 中学校一対人関係能力を育てる授業の最前線― 図書文化
- 原田友毛子・田中輝美 2006 構成的グループ・エンカウンター校内研修会におけるリーダーの働きかけ―実施への効力予期を高めるために― 教育カウンセリング研究, 1, 12-21.
- 橋口英俊 1990 アセスメント (國分康孝 編 カウンセリング辞典) 誠信書房, 7-8.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
- 粕谷貴志・小野寺正己・大谷哲弘 2006 高校入学時の学校生活認知と学校適応 教育カウンセリ

ング研究, 1, 36-42.

- 河村茂雄 2001 グループ体験による タイプ別！学級育成プログラム 中学校編 図書文化
- 河村茂雄・武蔵由佳・粕谷貴志 2006 中学校における現状のスクールカウンセラーの活動に対する教師の意識―期待する領域とその活動に対する満足感の検討を通して― 教育カウンセリング研究, 1, 43-50.
- 國分康孝 1981 エンカウンター 誠信書房
- 國分康孝・國分久子 2004 構成的グループエンカウンター事典 図書文化
- 文部科学省 2009 高等学校の現状について
- 品田笑子 1996 エクササイズ中にやること (國分康孝監修 岡田弘 編 エンカウンターで学級が変わる) 図書文化, 86-89
- 武田明典 2005 スクールカウンセラーによる中学非行生徒への包括的支援―相談室の枠組みを超えて― カウンセリング研究, 38, 385-392.

【謝 辞】

本実践で用いたエクササイズは、大谷哲弘先生、荻間澤勇人先生が開発したプログラムに基づき、著者が多少の改善をして実践したものである。現場に基づいたご指導をくださるお2人の先生に、心からお礼を申し上げます。

(2012年4月11日 受稿, 2012年11月11日 受理)

Appendix 1 振り返りシート

振 り 返 り シ ー ト !!	
組 番 名 前 _____	
今日の活動を振り返り、5段階で自分の気持ちを整理してみてください。5段階は次のように考えます。	
5→とてもそうだ 4→だいたいそうだ 3→どちらともいえない	
2→あまりそうではない 1→そうではない	
1. 活動前に比べ、緊張感はなくなりましたか？	5 - 4 - 3 - 2 - 1
2. 自分から積極的に、違うジョージの友達に声をかけることはできましたか？	5 - 4 - 3 - 2 - 1
3. 新しい友達との心の距離は近づきましたか？	5 - 4 - 3 - 2 - 1
4. これからの学校生活は楽しみになりましたか？	5 - 4 - 3 - 2 - 1
5. 次回こういう活動があるとしたら、また参加してみたいですか？	5 - 4 - 3 - 2 - 1
6. 活動の中で心に残っているエクササイズは何ですか？それはなぜですか？	
7. 全体を通して、思ったこと、感じたことがあったら何でもいいです。教えてください。	
今日は協力してくれてありがとうございました！！	

*Support for school adaptation of new high-school students by a school counselor**Kaho Kimura (School Counselor of Tochigi Prefecture) , Hayato Karimazawa (Morioka Agriculture High School)*

This is an example in which the reporter (who is a school counselor) helped 180 new high-school students for the purpose of relation formation at the time of entrance into a school. The structured group encounter was utilized to raise students' feelings of adaptation. The reporter performed the assessment, selection, and composition of the exercise together with the second author. The results indicated that the feeling of tension was released during a group activity for new students; promotion of relation formation was also observed. I believe that practical use of the structured group encounter at the time of entrance into a school is effective for the prevention of maladjustment in new students. Moreover, the specialization of the school counselor affected the deployment of the structured group encounter. School counselors can cope with the broad support needs of schools by responding to groups as specialists of mental-educational-support service; this can be accomplished through methods such as the group approach.

Key word : the new student of a high school, structured group encounter , school counselor